

# 英語コミュニケーション能力育成を意識した学習環境に関する考察

清水義彦\*

## A Study on the Instructional Design for the Development of Students' English Communicative Competence

SHIMIZU Yoshihiko\*

This paper presents an attempt to provide students with a real situation for English communication by using ICT such as emails, Bulletin Board System, teleconference system and video-chat system. Fostering students' communicative competence has been required in English classes for a long time. In order to achieve this goal, these experiments have been conducted since 1999 to create the situation for exchanging messages and information students would like to convey in the class.

**KEYWORDS:** English Education, Communicative Competence, ICT, teleconference system, peer to peer

### 1. はじめに

日本の英語教育の大きな課題のひとつは、「なぜ英語を学ぶ必要があるのか？」という学生の問いに代表されるように、いかにして学生の学習動機を高め、かつ維持するかということである。英語学習に意欲的な学習者であっても、そのモチベーションは受験に直結していることも多く、試験のスコアを上げることを学習の目的としてしまいがちである。<sup>(1)</sup>また、指導者も、知識偏重・文法訳読式の授業といった学習者の不在の教師の一方通行的な指導が問題となっている。<sup>(2)</sup>

現行の学習指導要領(2002年施行)および2003年に文部科学省からでた「英語が使える日本人の育成のための行動計画」により、学生の実践的なコミュニケーション能力の育成が今まで以上に英語教育現場に求められるようになった。1992年施行の学習指導要領にはなかった「実践的」という形容詞をつけた理由は、もう一度「コミュニケーション能力」の定義をしてみることの必要性を訴え、改めて外国語の目標として「外国語を現実的場面で実際に使用することができること」<sup>(3)</sup>の重要性を指摘するためであった。

また、現行の学習指導要領を実現するためには、情報の送り手と受け手のメッセージの授受が大きなキーワードであり、教室では単なるパターンプラクティスではなく、学習者が日常生活の中的话题を用いて「本当に言いたいことを言う、本当に聞いてみたいことを聞く」という真の意味でのメッセージの授受が求められている<sup>(4)</sup>。「本物のやりとり」の場面をいかに作るかが現場の教員に求められていた。

そんな中、2000年から文部科学省がはじめた「ミレニアムプロジェクト(学校教育の情報化)」で整備された学校の情報環境を、2003年に文部科学省が「英語が使える日本人の育成のための行動計画」で示した日本人育成のために活用できないだろうかと考えた。この2つの政策の目的、方向性に沿って、学校の英語の授業にもっと情報機器、インターネットを取り入れて、英語圏の人々と直接メッセージを交換すること環境を作り出すことによって、学生に英語の必要性・有効性を認識させ、そして自ら英語コミュニケーション能力の伸張に積極的に取り組む仕組みを考えたい。

本実践では、上記の情報ネットワークを利用して、

- eメール、電子掲示板の文字による海外在住者とのコミュニケーション
- テレビ会議システムによる海外の大学とのグループディスカッション

\* 国際教育センター  
e-mail: shimizu.yoshihiko@nc-toyama.ac.jp

・フリーソフトウェアを利用した1対1ディスカッションの3つの実践を報告する。

特に、英語教育でテレビ会議システムを利用した先行研究では、グループ対グループの形式がほとんどであった<sup>9)</sup>が、学生にとってよりよい学びの環境を提供することを念頭におき、1対1という新しい学習形態に取り組んだ。

## 2. 実践と考察

以下、ICTを活用した実践とその内容を時系列に簡単に記述する。文字による非同期型コミュニケーションから会話による同期型コミュニケーションへと移行していった流れとその理由を列挙する。

### 2.1 文字によるコミュニケーション

#### (1) eメールを使った実践

1999年、T高校の2年生の授業で、カナダ出身のALTおよびその家族にeメールを送る活動を行った。「教科書で習ったカナダについて確かめてみる」という活動である。この活動の目的は、教室内に英語を使う必然性を作り出し、学生は活動を通して本物の英語に触れ、情報の授受をしながら実践的な英語を学ぶ機会を作り出すことであった。当時は、eメールを使う人も限られていた時期であった。そのような状況もあり、学生が書いた英語に対して外国人から反応が来ることで、学生の英語学習へのモチベーションを上げることが、以下のコメントからわかる。「自分の英語が通じた。とてもうれしい。教科書の英語って役に立つことがわかった。」授業でのこの活動が終わったとも、メール交換を続けた学生もいる。

このように当時学校現場でも使われ始めたインターネットを活用して、文字によるリアルなコミュニケーションの場を作ってみた。

#### (2) 電子掲示板を使った実践

2001年、メールを使った活動をさらに発展させ、電子掲示板を使い始めた。この活動は、インターネット上の1つの掲示板で、クラスメート、相手のカナダ人が、1つの話題について書き込みをおこなう形式であった。テーマは、「日本の高校生活」であった。この活動の目的は、情報の共有であった。周りの友だちがどんな情

報を発信しているか見ることができることは楽しいことであり、また大きな刺激となると考えた。「周りから見られるので、自分の英語をより正確なものにしたいと辞書を良く使うようになった。」という学生のコメントから、学習への動機付けにもなることがわかる。写真もアップロードでき、発信する情報量は格段に増え、内容を深めることが容易にできるようになった。

### 2.2 会話によるコミュニケーション

上記のように、eメール、電子掲示板を使い、文字による活動を通して学生に英語学習の本当の意味を知る機会を提供してきたが、文字媒体による non-verbal communication の限界が以下のコメントからわかる。「1日かけて書いたが、その部分の反応が Sounds good!と一言だけではさびしく感じた。私がいいたいことが英語で十分書ききれないから、相手も面白くないのだと思う。」このことは、学生の限られた語彙、英語表現などでは、思いや感動を伝えきれない点にある。

そこで、この不足部分を補うために、non-verbal communication 中の gesture や body language か活用できる環境、そして音声による verbal communication の両方が自由に使える環境を作り上げるために、以下のとおりテレビ会議システムを併用しリアルタイムでのコミュニケーションを試みた。

#### (3) テレビ会議システムを使った実践

##### a. グループディスカッション形式1

###### —授業中の1つの活動として—

2002年、カリフォルニア大学アーバイン校(以降UCI)での研修の機会を得た。そこで、研修先のUCIと勤務先のT高校をISDN回線テレビ会議システムで結び、遠隔授業を実施した。その内容は、日米でペーパーを組み、4回の遠隔授業を通して「共通の話題」についてオリジナルのダイアログを作成し、プレゼンテーションを行うというものであった。しかし、高額な通信料がかかりテレビ会議の時間は限られていたので、学生たちは授業外の活動でeメールや電子掲示板を使い、原稿作成や発表の準備を行った。

こうして、今まで培ってきた文字によるコミュニケーション活動をベースにして、その上に会話によるコミュニケーションを乗せて、効果を高めることをねらった。

## b. グループディスカッション形式2

### ー学生主体の活動としてー

2003年、外国語を主としている専門学校で、コミュニケーションクラブを設立し、学生が自ら動く英語活動モデルを作ることを目的とした。今までの教師主導のディスカッションから学生主導のものへと移行をねらったものである。使用した機器は、上記と同じ電子掲示板、eメールをベースに、インターネット回線を利用したテレビ会議システムを使用した。通信費は無料になったため、毎週1回昼休みの40分間クラブ活動として、年間20回のテレビ会議が可能になった。学生主体の活動は、電子掲示板で双方の学生みんなでテーマを決め、日米双方の司会など役割分担・時間配分などを決めた。例えば、「日本の祭り」というテーマでは、日本側がホストとなり、地元の祭りを取材し制作したビデオクリップや道具を使ってプレゼンテーションし、その後、アメリカの反応をもらい、意見交換を行なった。翌週は、今度はUCIがホストとなりプレゼンテーションを行う、という流れであった。時には、クリスマスプレゼント交換をして、贈り物の違いを肌で感じ異文化体験をおこなった。

教員は、双方の学生が計画していることを把握し、互いの連絡を密にして環境を整えた。また、活動評価が各自で行えるようにした。具体的には、コミュニケーションストラテジー・チェックリストを作成し、自己評価を行った。このリストは、「今日の自分はどれだけアクティブなスピーカー/リスナーであったか?」を、活動直後に参加者ひとり一人が自己診断できるものであった。その結果を各自が次回へのフィードバックとし、毎回の英語学習活動がつながるようなしくみを作った。「この活動は、授業で習得した知識をアウトプットし、リスニング力を試すとても貴重な時間だ。」という意見がある一方で、「なかなか思うように言葉が出てこない。コミュニケーションがうまくできるように自分たちで何か工夫がいると思う。」と苦しむコメントもあった。これを受けて、学生が自ら動き出した活動を次にあげる。

1つは、活動をビデオにとり、発話単語数をカウントし、記録をつけはじめたことである。自分の発話の様子を見ることで、いい振り返りになったようである。そし

て、この振り返り活動から、学生の2つ目の自主活動である「モーニングセッション」が始まった。各自の英語コミュニケーション力をあげるために、毎朝始業40分前に集合し、身近な話題で会話トレーニングを学生自らがはじめた。このような学生主導の自主活動のみで、改めて自己評価の大切さがわかる。

### c. 1対1の個別ディスカッションの併用

2005年、この活動はカリキュラムの中の1年100分選択授業「ディスカッション」の活動となり、メンバーはこの授業を自らの意思で選択した新入生ということで一新したが、今までのようにモチベーションは高い。それだけに授業後の感想も具体的であった。

「がんばろうと思ったけど、グループの中ではなかなか思うようにしゃべれなくて残念だった。(5月13日)」

「私の周りだけで盛り上がったことが気になります。一言も発言できなかった人がいるのでは?(5月20日)」

「自分の英語に自信がないので、話したくても人目が気になり黙ってしまう。(5月27日)」

「司会をやってわかったけど、間をつなぐのが大変で、みんな誰かしゃべってくれるのでは?という無責任さと遠慮があるような気がします。(6月10日)」

という学生の反応から、周囲への気遣い、遠慮、気後れ、他人任せ、というような学生の心の中が読み取れる。これは、入学間もないころの希薄な人間関係も影響している可能性もある。

そこで、この改善策として、グループディスカッションに併用する形で、1対1の個別ディスカッションを加えることにした。新しく導入した機器は、PCソフトウェア google社スカイプ、およびMicrosoft社メッセージャーであった。この1対1の最大のメリットは、周囲の干渉を受けることなく、学習者は自覚と責任感をもって、日米ペアで、自分の意見を交わす訓練の場となることである。この実践を通して、参加学生の意識の変化が、英語運用能力を伸ばし実践的な英語が使える学生を育てることにつながるというねらいからも実施した。教材は、日本の風習・習慣に関する筆者のオリジナル教材を使用した。

以下は、新しい環境に移行した直後の学生のコメントである。学生が快適な学習環境で積極的に自分の

力を伸ばそうとしていることが読み取れる。

「とても話しやすい形だと思います。大勢でしていたときは周りのひとに遠慮することもあったが、今は誰にも気兼ねなく話すことができるし、発話量も当然増えるので会話力も間違いなくつくと思います。」

「みんなでやっていたときは、スピードについていけなくて、英語を聞くだけであせったり怖かったり、正直この授業が憂鬱だったけど、今は、話をすることがすごくうれしくて、毎週いろんな人と話せることが楽しみです」

「話そういう気持ちが以前より強くなりました。話に詰まった時も誰も助けてくれないので、冷や汗をかきながら力を全部出し切ってぎりぎりのところで勝負している感じです。野球の試合の時と同じ気分です。」

また、UCI の先生、学生のコメントからも活動がスムーズに流れ始めたことがわかった。

「こちらの学生一人一人を見ていると表情が以前の group conference と違いました。以前なかなか話せなかった学生も今回から、イキイキとした表情で、心からこの交流をたのしんでいたと思います。(UCI 教員)」

“I The conference was fun! I still can't believe it was the last conference of this year! It was a good end though. I really enjoyed working for JVC. It is one of the most wonderful experience I have. I am looking forward in doing it next year! :) I will miss you and all of the TCFL students.(UCI のリーダー)”

2010 年現在も、1 対 1 の個別ディスカッション中心に授業の中での取り組みを継続している。今は、教科書でアメリカの文化・習慣を読み取り、学生がさらに知りたい、聞いてみたいと思ったことをまとめ、1 対 1 の個別ディスカッションへとつなげている。そこで得た情報をもとに自分の考えを英語でエッセイにまとめ、文字による発信力をつける目的で文字でまとめる活動へつなげている。

### 3. まとめ

この 10 年間の実践を学生の感想を交えてまとめてみた。この間、英語コミュニケーション能力の育成を目

指して取り組んできた学習環境に技術の進歩と学生からのフィードバックをともに改良を加えてきたが、実践の方針は以下の点である。それは、いかにして学生の学習意欲を刺激して内発的動機付けを行うか、そして学生自らが行動を起こす自律した学習者として育てるか、ということである。そのための方策として、本物に触れ、授業、教科書の有効性を認識させることであった。今後も教室内に「英語を話す必然性」を作り出し、感動とともに厳しい環境の中、学生が精一杯頑張る学習環境をつくりあげることを目指している。

### 4. 今後の課題

今後は、現在のエッセイにまとめる活動を発信の土台にして、プレゼンテーションにつなげることを計画している。こうすることで、英語で収集した情報をもとに文字で自分の主張をまとめ、それを口頭で英語で発表する流れができ、英語運用能力が育つと考える。その伸長を定量的に測定、分析して、さらに学生が実力をつける学習環境と学習デザインを作り上げたい。そして、国際学会で発信する力をも身につける若者の育成に寄与したいと思っている。

### 5. 引用文献

- (1)岡崎浩幸:Student & Teacher Motivation-授業の改善,三省堂(2008)
- (2)辻郁生:実践的コミュニケーション能力の向上をめざした授業づくり, pp.23-30, 福井県英語研究会会報第60号(2002)
- (3)文部科学省:中等教育資料, ぎょうせい(2001)
- (4)新里眞男, 他:実践的英語教育の指導法 21 世紀の英語教育を考える, ピアソン・エデュケーション(2003)
- (5) Nishihori, Y., Nishinaga, N., Nagaoka, K., et al.: Enabling Cross-Cultural Learning Communities - Collaborative Networking Technologies and their Pedagogical Implications-, The Journal of Information and Systems in Education, Vol.3, No.1, pp.57-65 (2004)